

## 心の壁

中津川市立坂本中学校 3年 古井 千景

昨年の夏休み。私は、異文化交流のイベントへ行った。

そこでは、建物の一つ一つの部屋が違う国のブースになっていて、さまざまな国の文化の体験が行われていた。自分から積極的にいろいろな国の人と関わり、話した。ゲームもした。とても楽しい時を過ごした。終始笑顔でいられる・・・そのはずだった。あのブースを訪れるまでは。

私の心の中に、笑顔とはかけ離れた思いが生じてしまったのだ。

訪れたのは、アメリカのブース。そこにいたのは、黒い肌をした人、黒人だった。その黒い肌に気が引けてしまった。怖かった。できることなら、その場を離れたかった。このブースに来なければ良かったとさえ思った。その感情がどこからきたのか考えてみると、私の中で「黒人の住んでいるところは治安が悪くて、戦争や争いごとも多い。マナーが守られてないし、環境も良くない。それは一人一人の気が荒っぽくてすぐに怒るから。住んでいる所もゴミがあふれていて汚いから。暴動やテロが頻発し、暴力など、争いが絶えないから」というイメージが成り立っていたからだろう。他のブースでは自然と自分からかわしたあいさつも消えてしまっていた。どうしてもできなかった。おそらくその黒人を見る私の目は、氷のように冷たかったに違いない。

私の心の中にあったこと。それはこり固まった偏見と差別。私は知らず知らずのうちに見てきたテレビや新聞で「黒人は野蛮で乱暴で、不衛生で暴力的だ」というイメージをつくってしまっていた。私たち日本人に比べて文化が遅れていて、自分より下の人だと思っていた。例えば、東日本大震災後の日本の治安の良さに各国から賞賛の声があがったが、私は日本が素晴らしいのではなく、外国の意識が低いのだと思っていた。私は心の中では、このように無意識に人種差別ができあがっていたのだ。

一昔前のアメリカであった黒人差別。彼らは肌の色が違うというだけで、様々な差別を受け、同じ人間として生きていけなかった。

では今はどうだろうか。一見したところ、差別は無くなり、平等な社会が築かれているように思える。しかし、私の心の中には、平等な社会は実現されていなかった。昔のように公にあった差別ではない。しかし、心の中の小さな小さな抵抗感や偏見も、やはり差別なのだ。また、これが大きな大きな差別の芽になるとも言えるだろう。

私は、見た目や先入観による差別は、何も黒人差別だけに限ったことではないと思う。部落差別、性差別、障がいをもった人への偏見。私たちは、テレビ、

新聞を通してできたイメージ，先入観にとらわれてしまうことが多い。これはどんな人にも共通することだろう。でも，このままでいいのだろうか。このまま時間がたてば，消える問題だろうか。人の感情だから，仕方のないことなのだろうか。いや，それは違う。絶対に違う。今なら言い切れる。差別する側の一瞬の気持ち，一瞬の態度。些細なことだと思ふかもしれないけれど，相手にとってみれば，一生の傷にさえなることなのだ。差別は区別と違い，不平等な，不当な分け隔てのことを言う。不当なこと，それはあってはならないことなのだ。

バリアフリーという言葉は，すでに知れ渡ってきている。しかし，本当に大切なのは，歩道の段差を無くすことではなく，心の段差を無くすことだ。今必要なのは，心のバリアフリー，つまり偏見を無くすことだと思う。

そして心のバリアフリーを実現するには，バリアを張るきっかけとなるテレビ，新聞などの情報を正しく理解することが必要だと思う。例えば，治安が悪い国をテレビが取り上げた場合，それをその国の人すべてが暴力的だととらえるのは間違っている。どのような原因があって治安が悪くなっているのか，そこに住む人々の思いを知ることが大切なのだと思う。知らないから，知ろうとしないから偏見へとつながるイメージをつくってしまうのだ。情報を詳しく知ることによって，人々を正しく理解することができる。正しく理解すれば，偏見や差別，またそれらによって苦しむ人も減ると思う。

心のバリアをつくってはいけない。取り除かなければならない。あの夏の日，私はそう強く感じた。実際，あのアメリカの方はとても優しい方だった。私の心の中なんて知るよしもなく，とても親切にゲームの説明をしてくれた。私は自分が恥ずかしかった。申し訳ない気持ちでいっぱいだった。心の壁をなくし，生きていきたい。

もし，またあの人に会えたなら，心から笑顔でハローと言いたい。